

2026.06.14.

「ただ証言するだけ」

旧約 申命記 3 2 章 1 ～ 6 節

新約 ヨハネによる福音書 9 章 1 3 ～ 3 4 節

1. はじめに

先週はヨハネによる福音書 9 章 1 ～ 1 2 節に記されております「生まれつき目の見えない人の目が、イエス様によって開かれたと」いう出来事から御言葉を受けました。イエス様はこの時「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。**」と告げられました。この御言葉は、大変有名です。この御言葉によって生きる力と勇気をいただいた人はたくさんいます。キリスト者は、みんな神様の憐れみの御業が現れる舞台として生かされていると言っても良いほどです。皆さんも神様は私にこのように御業を行ってくださり、救ってくださり、神様の恵の中に生きる者にさせていただきました。それは一人一人全く違う状況の中で、全く違う出来事に会ったことでしょう。それをキリストの教会では「証し」と言います。誰もが、自分だけの「証し」をもっています。ここに記されているイエス様によって生まれつき見えない目を見えるようにしてもらった人もそうです。しかし、このイエス様に救っていただいた人の「証し」というものは、それを聞いた全ての人が納得し、了解するものではありません。「変な話だ」「とても信じられない」「そんな馬鹿な」と言う人もいるでしょう。いつの時代もそうです。この時もそうでした。でも、この人は「みんなに受け入れられる話をしよう」とは全く思いませんでした。どうしてでしょう？理由は簡単です。そんな話は彼には出来なかったからです。そんな作り話をする、嘘をつく、そんなことは考えも及びませんでした。彼は、ただ自分の身に起きたことを告げただけです。それで良いのです。それしか私共には出来ませんし、神様から求められてもいません。私共の神様は、私共の貧しい言葉によって飾られなければならないようなお方ではないからです。

今朝与えられている御言葉は、イエス様によって生まれつき目の見えなかった人の目が見えるようにしていただいた、その後のことが記されています。

2. 安息日の出来事

まず注目すべきことは、この出来事が「安息日」に行われたことであったということです。1 4 節に「**イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。**」とある通りです。ここで私共はもう一つの出来事を思い起こします。それはヨハネによる福音書 5 章 1 節以下に記されている「**ベトザタの池**」において、イエス様が 3 8 年間も病気で苦しんでいた人を「**起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。**」(5:8) との御言葉と共に癒やされた出来事です。この人は床を担いで歩き出しました。この時、ユダヤ人達はイエス様がこの人を癒やされたことを知り、イエス様を迫害し始めた (5:16) と記されています。「安息日」は何もしない。それが当時のユダヤ人にとって大切な信仰の証しでした。モーセを通して神様から与えられた十戒、その第 4 の戒めに「**安**

息日を心に留め、これを聖別せよ」とありますが、これを全うするために、当時のユダヤ人達はたくさんのはならないことのリストを作っておりました。イエス様は5章で長年病気であった人を癒やされたわけですが、当時のユダヤ人にはこれは明らかな律法違反であり、とんでもないことでした。イエス様はこれを知っていて行いました。そして、今回です。イエス様はこの日が安息日であることを承知の上で、この生まれつき目の見えない人を癒やされました。律法を守ることを一番大切な事だと考えていたファリサイ派の人達はこれを知り、とても冷静ではいらませんでした。しかし、みんながイエス様のことを「何ということをするのか。とんでもない奴だ。」と考えたかと言いますと、そうでもありませんでした。16節に「9:16 ファリサイ派の人々の中には、『その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない』と言う者もいれば、『どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか』と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。」とありますように、イエス様に対しての意見は分かれています。私はこのような記述を見ると、少しほっとします。だって、これが当たり前のことでしょう。一つの出来事に対して、色々な意見がある。それはいつの時代でも同じです。もし、ただ一つの意見しか存在しないとすれば、それは異論を許さない社会ということで、極めて危ない社会です。私共はただ独りの神様を愛し、信頼しています。それは、本当に正しいお方は神様だけだということを知っているということです。つまり、人間の考えや主張というものが「絶対に正しい」などということはないと知っているということです。しかし、人間はしばしば「自分の意見・考え・立場」を正しいものとして、異なる意見・考え・立場の人を間違っていると決めつけます。宗教や信仰といったものは、しばしばそのような所に立ってしまいます。私は、この過ちをいつでも自覚できるようにと祈ります。自分が絶対正しいとした途端に、人間は自分が神となるという最も大きな罪を犯してしまうからです。

3. 事実か、それとも信念か

第4の戒めの「聖別する」とは、「神様のために取り分ける」という意味です。ですから、安息日を特別な日として神様の御業を為すために用いなさいということです。ですから、何もしないことが正しい、目の前に病気の人がいても放っておくことが正しい、これはどうでしょうか？神様の御心に適っているのでしょうか？5章において長い間病気だった人が癒やされた時も、ここで生まれつき目が見えない人に見えるようにされた時も、「安息日の規定違反」としてその出来事を見ている人は、少しも喜んでいません。これが問題なのです。困窮のただ中にいた人がイエス様によって癒やされた。癒やされた本人は大喜びです。ところが、それを見ても少しも喜ばない、心を動かさない、そして「安息日の規定違反だ」と言って目くじらを立てる。「愛がない」と私は単純に思います。イエス様はそれをここで指摘されているのではないのでしょうか。イエス様が癒やされたのは事実でした。しかし「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う人は、自分の信念の方が困窮の人がイエス様に癒やされて喜んでいるという現実よりも大切だと考えたということです。イエス様が来られたのは、神様の愛、徹底した愛を示すためでした。愛する独り子を身代わりとして十字架に架けるほどに、罪人である私共を赦し、愛し、我

が子とされようとされた、この愛を示すためでした。そのために、イエス様は敢えて「安息日」に、この二つの癒やしをされたのでしょう。そして、神様の御心に適うのは、自分の信念を貫くことではなくて、自由に働いておられる神様の愛を業を喜び、賛美し、感謝することだと、イエス様はその癒やしの御業をもって示された。何度も申します。神様の御心に適うのは「キリスト者とはこのような者である」「このようにする者である」という信念に生きる者ではなく、自由に働かれる神様の御業を発見し、認め、その御業に与った人と共に喜び、祝い、感謝し、主を誉め讃えることです。使徒パウロはローマの信徒への手紙 12 : 15 で「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」と告げているとおりです。これこそ、神様の御心に適うことなのです。

4. 証言① 本人

さて、ここでイエス様によって目が見えるようにしていただいた人の言葉を見てみましょう。15節「ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。」ところ、彼はこう答えました。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」ここで、彼はまだ自分の目が見えるようにしてくれた人、イエス様の姿をその見えるようになった目で見えていません。ただ、問われるままに、自分の身に起きたことを正直に伝えました。そして、これを聞いた人はイエス様を「安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う人と「罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う人に分かれました。そして、人々は「お前はあの人をどう思うのか。」と、目を開けてもらった人に問い、彼は「あの方は預言者です」と答えました。彼は自分の身に起きたことを告げ、そして正直に自分の思いを告げました。これが「証し」、「証言」です。彼は何も脚色していません。自分の身の上に起きたことを告げ、自分が思ったことを正直に告げているだけです。イエス様によって自分の身に起きた出来事が、イエス様が誰であるか、どのようなお方であるかということを明確に示しているわけです。

5. 証言② 両親

しかし、この本人の証言を聞いた人が、みんなこの人の言葉を信じたかということ、そうではありませんでした。18節「それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということを信じなかった。」と聖書は告げます。信じる人もいれば、信じない人もいます。それが現実です。信じる、信じないは、その人の自由ですから、他の人が強制することは出来ません。それは仕方がないことです。信仰というものは、この「信じることも信じないことも自由」という所にしか成立しません。神様は、私共から自由を奪っても信じる者にするという事はなさいません。何故なら、神様を愛しておられるからです。自由のないところに愛はありませんし、強制的に愛させることなんて出来ません。信仰は神様・イエス様を愛することですから、自由は必ず確保されていなければなりません。

見えるようにしていただいた人の証言を信じなかった人は、この人の両親を呼び出して問います。19節「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうし

て今は目が見えるのか。」生まれつき目の見えなかった人が見えるようになる。そんなことがあるはずがないと、この出来事自体を信じるのが出来なかったのでしょう。それに対して両親は答えます。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。 9:21 しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」これももったもたな答えです。この両親は、この目が見えなかった人が見えるようになった場面に立ち会ってはいなかったのだと思います。ですから、息子が生まれつき目が見えなかったことは知っている。でも今は見えている。それは事実だ。しかし、それがどうしてなのかは、自分たちは知らない。本人に聞いてください。もう大人ですから。当然ですね。

でも聖書は、ここでとても気になる言葉を記しています。22節「両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。」この言葉をどう理解するのか？大きく二つの理解の仕方があります。文字通り「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていた」と理解する仕方です。これが高じて、イエス様は十字架に架けられることになったと理解します。もう一つは、この表現はこのヨハネによる福音書が書かれた時代背景が反映していると読む理解です。ヨハネによる福音書は福音書の中で一番後に書かれ、多分1世紀の終わり頃、つまり紀元後90年頃と推定されます。紀元後70年にエルサレムが陥落し、神殿がローマとの戦いであるユダヤ戦争によって瓦礫の山となりました。そして、ユダヤ教とキリスト教は完全に分かれ、ユダヤ人社会からキリスト者は排除されるということが起きていた。それを背景としていると理解するわけです。どちらを取るにしても、イエス様をメシア・キリストと告白するという事は、自分の生活さえも脅かされかねないことだったということです。イエス様への信仰を言い表すということは、そういう時もあるということです。そして、目を見えるようにしていただいた人は、そのような中でも、しっかりイエス様に対しての信仰を言い表したということが次に告げられています。

6. 証言③ 本人

ユダヤ人達は再び目を見えるようにしていただいた人を呼び出して問います。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」何とも、この人のこともイエス様のことも信用していないことが有り有りとして現れている言い方です。どうしてもイエス様を認めたくない訳ですね。しかし、この人は正直に答えます。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」この人は、自分の身に起きたことを正直に語ります。イエス様が罪人であるかどうか、それは解釈です。そんなことはこの人にとって知ったことではありません。自分に何が起きたのか。その事実がこの人には大切でした。ユダヤ人は更に問います。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」ユダヤ人達は、何か手品の種のようなものがあるのではないかと思っていたのかもしれませんが。イエス様の唾とか、混ぜた土とか、目を洗ったシロアムの池の水

に何か効果のあるものが混じっているのか？現代でも、科学的な理解こそが唯一正しい理解の仕方だと考える人は、そのように考えるかもしれません。しかし、この人は答えます。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」ユダヤ人たちの最も聞きたくない言葉を、この人は口にしました。そして、ユダヤ人達はこの人を「ののしって言った。『お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。 9:29 我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。』」もう、こうなるとイエス様に対しての態度が正反対ですから、厳しい対立になってしまいます。そして、目を見えるようにしていただいた人は、少しも恐れずこう言い放ちました。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないと、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。 9:31 神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。 9:32 生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことはありません。 9:33 あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」見事なものです。

目を見えるようにしていただいた人は、さっきまで道端で物乞いをしていた人です。教育も受けていなかったでしょうし、社会的には最下層の人だったでしょう。一方、このようにやり込められている人達は、ファリサイ派を中心とした当時のユダヤ社会において指導的な立場にあった人達です。教育も受けており、社会的な地位も信用も財産もあった人達でした。しかし、そのような人達が さっきまで道端で物乞いをしていた人にやり込められています。この違いははっきりしています。目を見えるようにしていただいた人は、イエス様の実際の力に触れ、癒やされ、全く新しい命に生き始めました。一方、安息日には何もしてはいけない、そのようにして神様の言葉を守ることが正しいことであり、その正しさによって人間は救われるのだという信仰秩序、社会秩序を彼らは作り上げてきました。それを何としても守らなければいけない。そう思っていたわけです。彼らが守ろうとしていたのは、信仰の体裁を取りながら、結局のところ「自分自身」であり「自分の信念」であり、「自分の正しさ」でしかなかったのではないのでしょうか。この世的には知恵もあり、知識もあり、地位もあった人達が、知恵もない、教育もない物乞いだった人に見事に論破されています。使徒パウロが「知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。」（コリント I 1:20）と告げているとおりです。

7. お前は全く罪の中に生まれたのに

そして、最後に彼らはこう告げました。「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。」よっぽど悔しかったのでしょう。彼らは「生まれつき目が見えない」という人を「全く罪の中に産まれた者」と理解していましたし、生まれた時から神様に見捨てられた人と理解していました。現代風にいえば、明らかなヘイトスピーチです。これは全く間違っています。神様に見捨てられている人なんていません。神様は愛です。徹底的な愛です。罪人さえも赦し、愛し抜かれるお方です。だから、私共も救われました。私共の中に「自分

は救われて当然だ。全く正しい者なのだから」などと言える人がいるでしょうか。一人もいません。イエス様は「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。**」(3節)と告げられました。イエス様は「この人は神様に見捨てられてなんかいない、愛されている、この人には神様が特別の御業を為そうとしているのだ。」と告げたわけです。イエス様は神様の愛の中でこの人をご覧になった。このイエス様の眼差しの中に、私共も生かされています。そして、イエス様はこの人の目を見えるようにされました。神様がイエス様によって、その特別な業、愛の業をなされたわけです。神様の愛を具体的に現すお方として、イエス様は来られたからです。5節で「**わたしは、世にいる間、世の光である。**」と告げられたのはそういう意味でした。神様の愛がイエス様によって出来事として現されたわけです。そして、私共も救われました。一切の罪を赦していただき、神様の子としていただきました。天地を造られた神様に対して「父よ」と呼ぶことが出来るものとしていただきました。何とありがたいことでしょう。

8. 私に何が起きたのか

目の見えなかった人がイエス様によって目が見えるようにしていただきました。イエス様によって変えられたわけです。私共もそうです。自分が神様に造られ、神様に愛されていることを知りました。神様の眼差し、イエス様の愛の眼差しの中に生きる者としていただきました。それは単なる気持ちの問題などではなく、出来事でした。自らの愚かさ、身勝手さ、傲慢さを知らされ、それでもなお「お前を愛する」という、イエス様の十字架の言葉を聞きました。だから、私共もこの目を見えるようにしていただいた人と同じように、自分の言葉で、自分に起きた出来事を語ることが出来ます。それは目に見えるような奇跡ではないかもしれませんが。しかし、出来事だったはずです。そして、それは一つではありません。洗礼を受けたとき、仕事が決まったとき、病気になったとき、癒やされたとき、結婚したとき、子どもが与えられたとき、様々なときに私共は生きて働いてくださる神様の御業に触れ、新しく歩み始めました。何度も何度も神様の愛に触れてきました。そして今があります。神様は生きて働いてくださっています。それを証言する者として私共は生かされ、立てられています。ですから、ここからまたイエス様の恵みと真実と愛の御業を告げる者として歩んでまいりたいと願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、御言葉を通して、あなた様が私共を愛し、救いの御業をもって私共に臨んでおられることを教えてくださいました。どうか、私共をあなた様が私共に為してくださった御業を、自分の言葉で語ることが出来ますよう、どうぞ聖霊なる神様御自身が働いてくださり、言葉を与えてくださいますように。恐れることなく、大胆に、そして正直に、真っ直ぐに、あなた様の御業を語らせてください。私共ではなく、ただ、あなた様の御名だけが誉め讃えられますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン